

2001. 9. 22

不妊手術のすすめ

講師 岡本 芳晴

- 講演内容
- 1 犬猫の解剖—生殖器
 - 2 繁殖生理
 - 3 不妊手術の方法
 - 4 何故、不妊手術が必要なのか
 - 5 最近の不妊手術の話題

5 項目

- 1 犬猫の生殖器 図で説明
- 2 繁殖生理

単発情---ある発情時期が来て、そして交尾。受胎する・しないに関わらず発情が終わる。

・発情周期 早くて4ヶ月から13ヶ月（平均7ヶ月）

4ヶ月ごとに発情がくる。周期は様々な因子によってかわる

※大型犬になる程、周期が長い 50kg以上は1年に2回(春と秋)

2kg(チワワ)～70kg（マスチル）

・春機発動 どの段階で性成熟に達するか（最初の発情）

犬猫はだいたい6ヶ月（6～9ヶ月）--子を産む能力がある

不妊手術の時期と関連

※ 大型犬ほど遅い（ゴールデン等、生後2年）

2年以上は病気を疑う

多発情---1年のうち、ある一定の期間発情がくる（牛・豚・霊長類）

《発情》 基本的に哺乳類は同じ：28日

犬 ♀ 発情前期：2～22日間（平均5～9日）出血

エストロジェン（卵胞ホルモン）が卵胞から出る

発情期：6～12日間 オスとの交尾—受精可能な時期

黄体形成ホルモンが下垂体から出でて受胎まで

発情後期：3～5日間 黄体ホルモンがさがってくる

無発情期：卵巣停止 ホルモンがなくなる

猫 ♀ 季節性多発情（早春～夏）—何回も発情 年4回出産可能

ネコ科・ウサギ科

交尾してから排卵後24～30時間で排卵

春機発動：6～9ヶ月

発情前期：12～48時間

発情期：オスとの交尾

無発情期：消失

《犬猫の妊娠期間》

犬：63日（58～68日）：7～10日精子が生きている

猫：63日（62～66日）

《妊娠鑑定》

腹部触診：24～32日：直径2.5～4cmの球状のふくらみを触知可能

40～45日：レントゲンで、胎児の骨格が見える

※ 不妊手術は産まれる直前まで可能

3 不妊手術の方法

a 幽閉 家の中に閉じ込めておく（♂♀）

b 外科的療法 ♂ 精巣を取る（性行動をやめさせる）－開放的去勢手術
閉鎖的去勢手術

♀ 卵巣子宮摘出術－性成熟している場合

（1回でも発情がきていたら）

※ 卵巣だけを取ると子宮蓄膿症になりやすい

卵巣摘出術－早期の場合

c 内科療法 ♀ ピル－卵胞の発育の抑制（ずっと妊娠している状態）

4 不妊手術の必要性

1 発情行動の阻止－鳴き声、マーキング等

2 野良犬猫の増加阻止－人畜共通伝染病のひろがり（最近増加傾向）

- ・ 狂犬病（哺乳類であればうつる）
- ・ レプトスピラ症 ネズミ等(腎炎)
- ・ トキソプラズマ症 ネコから
- ・ 寄生虫病

人への危害 不妊していない犬猫は人を噛む確率が高い

税金の無駄使い 人件費

処分にかんりの費用

性ホルモン依存疾患の予防 早期にするとなる確率が低い

(性成熟する前)

♀ 乳腺腫瘍発生の予防

♂ 前立腺疾患の予防

《諸外国における不用犬猫の報告》

1975 Hummer (米)

1984 Jackson (英)

1991 米国獣医師会雑誌ニュース (特集)

1993 同上

1993 Olson&Moulton (米)

1999 Mahlow (米)

《不用犬猫頭数 (年間)》

米 1993 犬 1000万頭

1997 犬 410万頭 (約250万頭処分: 160万頭譲渡一里親)

不妊手術・ワクチンしてから

1998 犬 45万頭 猫 25万頭 計70万頭

カリフォルニアでは6ヶ月未満の犬猫を飼う場合、手術している・していないで登録料金等をかえている

5 最近の不妊手術の話題

1 腹腔鏡手術 ここ10年で世界中に広まった

長所: 切開創が小さく、最小の損傷で術野に到達可能 (炭酸ガスを注入)

(5mm~1cm)

術後の疼痛が少なく回復が早い

大型犬程メリットが大きく、卵巣・子宮等の取り残しがない

短所: 使用する装置が高価

開腹に比べ手術時間が長いー手術者の問題でトレーニング次第

2 早期不妊手術 手術手技が簡単

利点: 手術時間が短い

《実施時期》

経済的 (麻酔量が少ない為)

♂ 8~10ヶ月→8~12週

♀ 6ヶ月→1ヶ月半~2ヶ月

3ヶ月未満 (性成熟前)

これまで悪影響—骨格形成の発育不良　　があるとされてきたが、
外部生殖器の発育不良
免疫不足による感染症
実際には可能性の問題であり起きた報告はない

《報告》

- 1971から実習　　性成熟に達するまでの6ヶ月未満
30年経過　全くトラブルなし
- 1982（リバーマン）
- 1997（米）　　1996年に英で早期不妊手術に対する論議が行われ、その反論として報告
6ヶ月未満の犬1000頭・猫2500頭—問題なし
- 1998（米）　　教科書(4版より)　全く問題なしと記載
早期不妊手術を奨励も否定もしていない

《例》

- 1　1993　とある州、早期不妊手術による安楽死の総数の移行を調査
（結果が出るのに3年かかる）
- | | | |
|------|--------|------|
| 1973 | 14000頭 | |
| 1979 | 9700頭 | 40%減 |
- 早期不妊手術によって不用犬猫を減らす事が出来る

2　鳥大で早期不妊手術を実施（6～7週令）

印象：回復が早い

子猫の場合、麻酔が危ないと言われてきたが、けしてそれはない。
性成熟に達してからの手術は血管をきちっと結束しなければならず、これがとても難しいが、子猫の場合は電気メスでやけばよいだけで、技術的には後者が簡単。6ヶ月経過したが何のトラブルもない。

=質疑・応答=

1　早期不妊手術の料金について

まだ設定はしていないが、体重が軽く薬の使用量も少ない・回復が早いので、入院をさせない事を考慮して、

♂　5000～10000円　1分30秒程で終わるので、手術でなく処置で対応

♀　検討中　時間は半分（獣医サイドの問題）

値段に関して、一律には出来ない。低料金でするにはリスクがでる。

学生に臨床実習のキャンペーンをやらせているが、それ程安くは出来ない。

岡本先生の意見

餌だけを与えられている半ノラ猫、栄養状態がよくなりすぐ繁殖。
餌が一定量しかない為、あぶれる猫が出てくる－容易に餌を与える事は動物虐待につながるのは？

ノラ猫を減らそうと思ったら、容易に餌を与えない事。

感染症の面からも、県・獣医サイドも出来る事から、もっと積極的にこの問題に取り組んで欲しい。

獣医学も進歩し続けているので、獣医向けの講演会も必要なのでは？
早期不妊手術については、外国のデータを参考にしながら、鳥大でも3年かけて分析し、早期不妊手術が大丈夫であると報告していきたい。

県の意見

情報収集から始めないと実態がまだ把握できていない